

漢字文化の展望

2022年3月19日(土) 14:00~17:00

オンラインシンポジウム

基調講演

東アジア漢字文化の過去・現在・未来

金文京 京都大学名誉教授

簡牘文字“各”旁的省略

曹方向 海南師範大学

通訳 草野友子 JSPS特別研究員RPD

中国古文字のデジタルテキスト化に関する諸問題

山田崇仁 立命館大学

鼎談

漢字文化の展望

金文京・曹方向・山田崇仁

司会 村上幸造 立命館大学

総合司会 山本優紀子 立命館大学

聴講無料
要申し込み
手話通訳



日本は独自の文字をもたない国です。「漢字があるではないか」というなかれ。あれは隣の国の発明で日本人はそれを借りているだけです。「ひらがな・カタカナがあるじゃないか」というなかれ。あれは漢字の草書体や漢字の一部分を利用したものです。そもそも漢字がなければ、ひらがな・カタカナは存在しませんよ。だから日本は独自の文字をもたない国です。でも、いじけてはいけません。歴史が始まってから以降、そういう例は多々あります。シュメールが文字を発明し、アッカドはそれを利用しました。シュメールとアッカドの文法はまったく異なるんですよ。でも文字は文法とはかかわりなく使えます。「そういえば、たしかに中国語と日本語の文法は違うよな」と、あたりまえのことに、いまさら気づきましたか。ついでに言えば、日本語と英語の文法もまったく異なるのに、ふつうにローマ字を使っていますよね。

「山」は本来、何と読みますか？「やま、でしょ」。さんねん！それは本来、読み方ではなくて、やまとことばを宛てただけの宛字(当て字)ですよ。日本語を知らない中国人に読んでもらってごらんさい。「やま」とは読みません。いまだったら「shan」、唐代あたりだったら音読みの「サン」に近いかな。

さて、「漢字」という語は、唐代あたりにはじめて作られました。そのことは、今回の発表者の山田崇仁氏が詳しく調べられています。だから、厳密に言えば、それ以前の中国の文字は漢字とはいえないのです。でも、今回は堅いことはいわず、甲骨文あたりから始まる文字も含めて漢字としましょう。甲骨文・金文・篆書・隸書・楷書・行書・草書といった字体の変遷はあるものの、紡ぎだされた文字文化は中国国内だけでなく周辺の国々にまでひろがっていきました。そこにはたくさんの人々が往き来したはずですよ。人が来なければ、あるいは人が往かなければ、発音だってわかりません。漢字の文化は人々の交流の記録でもあるのです。

金文京氏には、東アジア全体を視野に入れた大きなお話をしてもらおうと思います。ただ、あちこちに細かい話も入れてもらおうつもりです。

曹方向氏には、出土資料のお話をしてもらいます。ここ掘れ、ワンワンというわけではありませんが、地中という過去からは出土文献という宝物が出てきます。一流の学者が推論を重ねて考察したことが、「こんなものが出てきましたよ」で、一瞬にしてくつがえってしまいます。こわい世界です。でも、こわいものほど面白いんです。

山田崇仁氏には、現在のデジタル化された漢字文献の扱い方とその未来を語ってもらいましょう。いまは四庫全書の七億文字が一瞬で検索できます。ただ、それだけでは足りないことがあります。さきにみた「漢字」という語が唐代に出てくるということは四庫全書では調べられません。仏教関係のデータベースも調べる事によってはじめてわかるのです。新しい資料とツールによって漢字文化は新たな展望を見せるでしょう。

連絡先: <https://forms.gle/FnzHL8g6a4u6sPfE9>

主催 立命館大学 衣笠総合研究機構

共催 白川静記念東洋文字文化研究所・漢字学研究会

基盤研究(C) 情報化時代における佚文収集の手法についての研究：大蔵経からの抽出を事例として
立命館大学研究推進プログラム(科研費獲得推進型)「殷周金文のデジタル化に関する基礎的研究」



立命館大学 白川静記念

東洋文字文化研究所

